

# らいふプラス



この店には毎日来る。甘いものが好きなので、なかなか、どら焼きなどを注文する」と年配の女性。「幽が悪いので、夜におかゆを食べに来る」と70代男性。埼玉県幸手市にある「元気スタンド・ボリズム」には様々な人が来ます。平日の午後に、店を訪ねた。60代の女性7人がいくつかのテーブルに分かれ、コーヒーを飲み、食事をしながら談笑している。「朝帰宅したら風呂に入ってるだけ」という一人暮らしの人もいた。

「コミュニケーション喫茶」をうたい文句に開店して2年近く。朝8時半から夜8時まで営業し、30人前後が来店。1日に2万~3万円の売り上げがある。店長の小泉圭司さん(41)は徐々に手応えを感じている。

「この店には毎日来る。甘いものが好きなので、なかなか、どら焼きなどを注文する」と年配の女性。「幽が悪いので、夜におかゆを食べに来る」と70代男性。埼玉県幸手市にある「元気スタンド・ボリズム」には様々な人が来ます。平日の午後に、店を訪ねた。60代の女性7人がいくつかのテーブルに分かれ、コーヒーを飲み、食事をしながら談笑している。「朝帰宅したら風呂に入ってるだけ」という一人暮らしの人もいた。

## カフェはシニアのたまり場

### 市民運営の喫茶・食堂広がる



定年男性同士、調理をしながら会話を弾む(東京都世田谷区、「おとこの台所」)

地域の人々が交流できる場として、市民団体などが開設する喫茶室や食堂が各地に増えてきた。これらは一般に「コミュニティーカフェ」と呼ばれる。特に定年退職者や一人暮らしのシニア層の生活を「食」の面から支え、孤立を防ぐ役割が注目されている。全国組織をつくる動きも出てきた。

一緒に飲み食ることは人間関係を築くカギ。「コミュニティーカフェはここに焦点を当てた。シニア男性代表の小竹智久さん(70)、「おとこの台所」

### 男の料理サークル 大繁盛

(東京都世田谷区)を見ても「食」の大事がわかる。2002年に8人で発足した同サークルは、関係を築くカギ。コ

大学が地域商店街と組んで力関係を築く例も。東京都豊島区「大正さん」はその一つだ。

大正大学の社会

福利学専攻の大学院生がスタッフ

となり、空き店舗を活用して、

お茶を飲める場所を05年に開いた。

最近は「学生出前定期便」

人。区の施設5カ所に分かれ会を開いているが「新規入会者の受け入れ余地がないほど盛況」と代表の小竹智久さん(70)。

頭にバンダナをしてエプロン姿。楽しみは出来上がった料理

と代わり余地がないほど盛況」と代表の小竹智久さん(70)。

頭にバンダナをしてエプロン

姿。楽しみは出来上がった料理

と代わり余地がないほど盛況」と代表の小竹智久さん(70)。

頭にバンダナをしてエプロン

姿。楽しみは出来上がった料理